

〔学術論文〕

ラフカディオ・ハーンの『チータ』に
見られる自然と文明の関係
Nature and Civilization in Lafcadio Hearn's *Chita*

山田 和夫
Kazuo Yamada

要旨：ラフカディオ・ハーンは『チータ』執筆の過程で、大自然の猛威から文明の力で子供を庇護する養母のテーマを発見する。マルティニーク渡航直後のハーンは、亜熱帯の自然を妖艶な魅惑と感じたが、次第に自然は必ずしも桃源郷ではなく実母のような生産力と破壊力を兼備することに気づく。ハーンにとって自然は、妖艶な魅惑から破壊力を秘めた不可知なものに変化した。不可知的自然は人知を越えた世界という意味で文明の狭い価値観からの解放ではある。だが一方で不可知的自然の驚異に対抗できる文明の庇護をハーンは模索し、養母のテーマへ辿り着く。

ハーンの世界・文明観では、実母は自然を、養母は自然と折り合う文明を象徴している。彼は自然から乖離した大都市には魅力を感じなかったが、自然観に関してはファムファタリックな妖艶な自然観から、スペンサー的な不可知の自然観を形成するに至った。また可知界の外側で不可知界のエネルギーは永続するという輪廻思想の原型を持つようになる。反面スペンサーの文明序列化に対し、彼は常に異文化への暖かい視線を持っていた。

ハーンのこの自然観の変化と養母のテーマの発見は同時期に起こっており、『チータ』は彼が文明から自然への逃走に区切りをつけ、文明への回帰に向かう契機となった作品と言える。

キーワード：ラフカディオ・ハーン、『チータ』、実母的自然、養母の文明、スペンサー

はじめに

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) は近代西欧の合理主義に馴染まず、文明への違和感を持っていた。ところが晩年日本では、家庭を持ち永住を考える。彼にとって養子縁組をして獲得した「家庭」は自意識的に選ばれた文明を象徴し、彼は一旦文明から自然へ逸脱しながら再び文明へ回帰したと言える。自然・文明・家族というテーマはハーンを解釈するにあたって重要な視点であり、これらのテーマを彼が初めて具体的に扱った作品が『チータ』(*Chita: A Memory of Last Island*, 1889) である。本稿では『チータ』におけるハーンの世界観、文明観、

家族観について論じたい。

ハーンの独特な自然観、文明観、家族観の基盤となったのは、悲遇の幼少期であろう。幼くして実父母と生別し、本来ならば大自然の恵み溢れるギリシャの島で実母からの寵愛を受けるべき時期に、島と比べるとより文明圏に近いダブリンの都心で、大叔母によって育てられる。幼少期から青年期を過ごしたダブリン、ロンドンの社会、また19歳で無一文で渡米した先のシンシナティなどの文明社会で、彼は辛酸をなめる。シンシナティで当時の法律を犯し、職を辞してまで混血女性マティ・フォリー (Mattie Foley) と結婚したのは、当時の文明社会の枠組みに収まりきらない生き方を模索する試みだったのかも知れない。その結婚生活に破綻し、ニューオーリンズに移り住んでからは、ハーンは文筆家として徐々に名を上げていく。そしてジャーナリストとして、確かに近代西欧文明の一端に居場所を見つけた。

しかしマルティニーク渡航で彼にとっての転機が訪れた。文明から離れ大自然へ飛び込んだことで彼は刺激を受け、『チータ』、『ユーマ』 (Youma, 1890) などメキシコ湾やカリブ海の島を舞台とした作品を生む。『チータ』を執筆した当時、ハーンの内面では、自然・原始の力が文明・家族の力に勝っており、物語中、嵐のために離散した家族たちは再会の感動を味わうことはなく、物語は終わる。自然は人間の営みに協力することはなく、あくまで無関心である。

だが、晩年のハーンは日本で家族を持ち養子縁組をして永住を考える。これは文明としての家族へ回帰するようになった、彼のもう一つの転機と言えよう。ハーンは大自然の uncontrollable なエネルギーの描写に積極的であるが、一方で『ユーマ』においてはダー (乳母)、『チータ』においては養父母ビオスカ (Viosca) 夫妻が、言わば自然に対する「文明」とも言える家族を形成している。彼らが荒ぶる「自然」からの防御壁として機能している舞台では、自然は人間と協調する理想的なものとして描かれる。このように、ハーンのアメリカ時代後半から、彼の内部で文明の肯定的な力が徐々に強まっていた可能性はあるが、やはり『チータ』においては未だ、大自然の力が人間の運命を翻弄している。

ハーンは『チータ』執筆当時、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の宇宙観の影響を受けていた。『チータ』におけるハーンの自然観には確かにその影響が見られる。だがその一方でスペンサーの社会的ダーウィニズムとは相反する、様々な文化の多様性への理解を描き、多文化主義の先駆的な感性も膨らませている。本稿では、まず『チータ』に描かれるハーンの自然観と文明観をまとめ、ハーンがどの程度までスペンサーの影響を受けていたのかを明らかにすると共に、ハーンの養母というモチーフが、自然と文明の二項対立の中で一種の仲介役として働いて、ハーンの文明への回帰につながることを検証する。

1 ハーンの自然観と文明観

『チータ』は『ユーマ』に先駆けて、1886年から87年にかけてニューオーリンズで執筆され、

89年に単行本として刊行された。もともと1883年、友人の作家ジョージ・ワシントン・ケーブル (George Washington Cable) から聞いた実話を元に書かれた小説である。作品の粗筋は次のとおりである。

19世紀当時、ニューオーリンズ沖に浮かぶラスト島 (L'Ile Dernière) は、フランス系上流階級の人々の避暑地として栄えていたが、1856年8月10日夜、記録的な大嵐に襲われ島全体が水没する。翌朝奇跡的に、一人の四歳の女兒が死んだ母親の身体にしがみついて漂流しているところを、同じメキシコ湾岸の別の島、グランド島に住むスペイン系漁民ビオスカ夫妻に救助される。夫妻は、ほぼ同年の娘コンチータ (Conchita) を失ったばかりで、その拾い子にチータと名をつけ育てる。チータは荒ぶる海を畏れながらも海と共に成長し、泳ぎを習得することで感謝を覚える。一方、同様に嵐の夜に通りがかった船に偶然助け上げられたチータの実父ジュリアン・ラブリエール (Julien La Brierre) 医師は、ニューオーリンズで医療に打ちこんでいた。天災から11年後の1867年、マラリアが大流行した夏、ジュリアンは往診先のグランド島で自身がマラリアを発病する。彼は、臨終間際に病室に現れた地元漁村の少女を見て、彼女が嵐で亡くした妻の若い頃に似ていること、その右首筋に死別したはずの幼い娘と同じ痣があることに気づく。しかし朦朧と消え行く意識の中で、チータとの意思疎通は果たされず、ジュリアンの人生と物語は終わりを迎える。

(1) 実母と養母

『チータ』では島の自然が多く描写されているが、中でも海に焦点が当てられている。そして海が描写されるところでは、頻繁に女性、母のイメージが表現されている。たとえば第3部「高潮の影」(The Shadow of the Tide) の第2章では、海は様々な形態をとり謎めいており、化物や神々の母 “mother of the monsters and the gods” (233) のようだと述べられている。母性とは単なる子供への優しさ、自分の子供を守り育てようとする性質だけではないことに、ハーンは気づいていた。生み育てる力を持つ母親は場合によっては死や破滅をもたらし、自然は万物の生成者であると同時に破壊者にもなり得る。1852年、ハーンの母ローザ (Rosa Antonia Cassimati) は二歳のハーンを連れ夫の実家のあるダブリンへ渡るが、新生活になじめず神経症を患い、ハーンが四歳の頃单身ギリシャへ帰る。物心つく前に実母と生別したハーンが、生産力と破壊力を併せ持つ大自然の力を、原始的な母性と結びつけたとしても不思議はない⁽¹⁾

以上のように、自然・原始は母性で表されるという考え方がハーンの自然観の根底にあり、『チータ』においては荒ぶる海がその例である。一方彼の文明観には、理想的な文明を養母に擬える図式があるように思われる。ここで養母についての仮説を立てる理由は、ハーン自身がダブリンで大叔母という養母に育てられただけでなく、当時のハーンのフィクション作品の中で養母が重要な役割を果たすケースが他にもあるからだ。例えば『ユーマ』に登場する黒人乳母ユーマも、

若くして誕生直後に母親を亡くしたマヨット (Mayotte) の養母となり、文字通り最期まで子供を庇護する。

『チータ』では、養父母のビスオカ夫妻が海からチータを拾い上げ命を救う。養母カルメン (Carmen) は海にまつわる様々な言い伝えや話 “the proverbs about its [of the sea] deafness, its avarice, its treachery, its terrific power” (224) を聞かせ、海という不可解な自然を擬人化し物語化することを教える。それによってチータは自然を文明化、言語化することを学んだと言えよう。養父フェリユー (Feliu) は彼女に泳ぎを教え、“The world is like the sea: those who do not know how to swim in it are drowned.” (231) との信念で海という大自然からの護身術を伝授する。泳ぎを教わる頃からチータの海との接し方が変わり、それまでは両親の命を奪った海を化け物のように恐れていたのだが、泳ぎを覚えることで盲目的な恐怖から解放されていく。すなわち文明の力で自然をコントロールできるようになり、“The sea appeared to her [Chita] as something that had become tame for her sake, something that loved her in a huge rough way.” (233) というように海を「自分を荒っぽいやり方で可愛がってくれるなにか」と捉えるようになる。彼女は海への恐怖を乗り越えると同時に、父母喪失の痛手をも乗り越えていく。

(2) 都市の描写

前述のように作品『チータ』、『ユーマ』においては、言語や技術という文明の力が人間を庇護する機能を発揮する舞台では自然は人間に協調的なものとなり、それが存在しない、またはうまく働かない舞台では自然は猛々しいものとなる。そのような保護機能のある文明は養母として働く。では人間活動の舞台として、「自然」と対極に位置する「都市文明」についてのハーンの見方はどのようなのだろうか。

作品『チータ』の端々には、大都市に対する否定的な眼差しが伺われる。以下は、疫病が流行した1867年夏のニューオーリンズの描写である。街は、「夜は毒を含んだ蒸気 “venomous vapors” が冷えて結露 “morbific dews” をもたらし病気を広げ」、「昼は霊柩車や会葬者の行列 “the interminable procession of mourners and hearses and carriages” が果てしなく行き交うゴーストタウン」として描かれている (235)。

ハーンは『チータ』以前にも、1884年11月30日付の *New Orleans Times-Democrat* に寄せた “The Roar of a Great City” というタイトルのエッセイを書いているが、その中で街の上を交差する電線を風がたたき、唸りのような音を発する様を否定的に描いている。当時は当然地下ケーブルの発想も技術もなく、頭上に電線が張り巡らされる街の景観は、まさに先端技術の賜物とみなされたであろう。実際マーク・トウェイン (Mark Twain) は『ミシシッピ河上の生活』 (*Life on the Mississippi*, 1883) の第41章「南部の都市」 (The Metropolis of the South) の中で、当時のニューオーリンズについて、電灯による照明に関してはニューヨークよりも数が多く上質で

あること、娯楽場も栄え、電話はいたる所に通じていること、ジャーナリズムも進歩していることなどを書いている(Twain 475)。トウェインは『コネティカットのヤンキー』(*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1889)で、科学技術の発達や合理主義を礼賛しつつその行き過ぎを皮肉っているが、少なくともニューオーリンズの都市化は一応好意的にとらえている。

ところがハーンにとっては、これらは文明の勝利品ではなく、街の上を走る電話線が風に叩かれる音は物悲しい金属音 “a buzzing metallic sound that almost drowns your conversation”、死にゆく者の断末魔の叫び “the last wail of a dying man” のように聞こえていた(Lafcadio Hearn's *America* 229)。ハーンがニューオーリンズ時代にジャーナリストとして書き続けた記事、コラムには、クレオール言語、文化の魅力を伝えるものも多いが、以上の引用のように死、荒廃を思わせる記述も多い²⁾。

ハーンが都市文明に対し死のイメージをしばしば当てはめるのは、彼の都市体験が影響しているのかも知れない。1877年11月、ミシシッピ川を下りニューオーリンズ入りしたハーンは、この地で日本滞在に次いで長期間の10年間滞在することになる。以前8年間を過ごしたシンシナティで彼は、辛酸を嘗めながらも次第に記者としての職業に活路を見出した。ニューオーリンズ到着時も彼は、シンシナティ・コマーシャル(Cincinnati Commercial)社の特派員を解雇され、慈善団体の世話になったり路上で寝たりといった赤貧状態から再スタートした。また当時は街全体に、南北戦争後の再建期の活力と黄熱病の流行という災禍が併存しており、ハーンはその中で逆境のどん底からタイムズ・デモクラット(Times Democrat)社の文芸部長になるまで出世した。シンシナティやニューオーリンズという都会は、彼に名誉ある地位や物質的成功を獲得する機会を与えてくれたが、そこでの生存競争は悪夢に等しい凶々しさの印象をもたらし、ハーンの都市文明観に影響したと考えられる。ハーンはニューオーリンズの多用な文化の魅力をよく理解していたが、全般に彼の都市文明観には否定的な要素が多い。

2 『チータ』と自然

次に『チータ』に描かれるハーンの自然観、文明観を、19世紀後半から20世紀初頭にかけて欧米を中心に広がっていたスペンサーの思想と比較しながら、その影響を検証する。

ハーバート・スペンサーはイギリスの経験論の集大成とも言うべき『総合哲学大系』(*The Synthetic Philosophy*, 1862-1893)の著者で、その構想を発表後、30年間にわたり『第一原理』(*First Principles*, 1862)、『生物学原理』(*The Principles of Biology*, 1864-67)、『心理学原理』(*The Principles of Psychology*, 1870-72)、『社会学原理』(*The Principles of Sociology*, 1876-96)、『倫理学原理』(*The Principles of Ethics*, 1879-93)を刊行した。彼は星雲の生成から人間社会の道徳的原理の展開に至るまで、物理的、心理的、社会的、倫理的諸現象を、進化の原理に

基づいて組織的に叙述し、認識の相対性を主張した。彼の思想は、当時の科学万能の風潮の中で興隆し始めていたダーウィニズム生物進化論とも結びついて普及し、1882年8月から11月までアメリカに招かれ各地を訪問した。当時ハーンはニューオーリンズの新聞『タイムズ・デモクラット』の文芸部長で、日曜版を中心に執筆活動を展開しており、同年10月8日の日曜版に、スペンサーの『社会学原理』第二巻の書評を発表している（大東126-27）。

以下は、1887年4月にニューオーリンズからエリザベス・ビスランド（Elizabeth Bisland）に宛てた書簡の抜粋であり、ハーンが特にスペンサーの『第一原理』に心酔していたことを示している。

I am trying to get all my friends to read Herbert Spencer --beginning with "First Principles." I am now wrestling with the two big volumes of "Biology," and have digested one of the "Sociology." The "Psychology" I will touch last, though it is his mightiest work.... But "First Principles" contain the digest of all; --the other volumes are merely corollaries. (*Life and Letters II* 15)

本人が認めているように、ハーンが19世紀の最先端の科学であったスペンサー思想に強い影響を受けていたことは間違いない。しかし彼はどの程度それに縛られていたのか、もしスペンサー思想を越えた部分があるならばそれはどの辺りかを、次に検証する。

(1) 妖艶なる自然から不可知の自然へ

まず第一に、スペンサーとの出会いにより、ハーンの大自然の捉え方が、妖艶な女性のイメージから人知を超えた猛威のイメージに変化していったことが考えられる。

ハーンは以前から南の自然に対して妖艶な女性を投影する感覚を持っていた。彼の死後に刊行された、スペンサーと出会う以前のエッセイを集めた『印象派作家日記抄』(*Leaves from the Diary of an Impressionist*, 1911) において、「クリーオール雑記」(*The Creole Papers*) の「仏領西インドにおけるクリーオール婦人」(*Creole Women in the French West Indies*) の中で、次のような著述がある。“Tropical nature is indeed an enchantress; but she does more than bewitch, she transforms body and soul.... she lulls the higher faculties to sleep while gratifying, as nowhere else, the physical wants of life.” (55-56) つまり熱帯の自然を妖術で人をたぶらかす妖艶な魔女に例えている。

更に『チータ』の第1部の『「最期の島」の伝説』の第3章では、グランド島の一群の檜の木が、水平線を背景に一例に並んだ女性の姿 “five stooping silhouettes in line against the horizon,

like fleeing women with streaming garments and wind-blown hair,--bowing grievously and thrusting out arms desperately northward as to save themselves from falling” (151) に例えられている。ハーンがここで当時の世紀末芸術のファム・ファタル像をどの程度意識したかは定かでないが、この「髪や衣服を風になびかせ、体を曲げて逃げる女性」は、自然の猛威を表現しつつ、一方で髪をふり乱し身をよじる女性の混沌が造りだす魅力もほのめかしている。牧野陽子は論文“Hearn's ‘Yuki-Onna’ and Baudelaire's ‘Les Bienfaits de la Lune’”の中で(205)、またジョージ・ヒューズ (George Hughes) は『ハーンの轍の中で』(*Looking Forward and Looking Back: Essays on Hearn and Teaching in Japan*) の中で (123)、ハーンが作中にファムファタルの特徴を取り入れたことを指摘している。

性的魅力を示す自然は、更に第4章のクラゲの描写に明確に見られる。語り手はクラゲ (medusa) を心臓に例えてその妖艶かつ怪しげな魅力を “beautiful veined creatures that throb like hearts, with perpetual systole and diastole of their diaphanous envelops” (157) と表現している。それは単なるクラゲの描写を越えて同じスプリングのギリシャ神話のメデューサをも連想させる。メデューサはもとは美女だったが、後には見る者を石に変えてしまう怖い化け物となる。

これらに対し『チータ』の第5章では、島を襲った暴風雨の様子や、その夜島で開かれていた華やかな晩餐会、その大ホールが高潮に流される断末魔が描写され、自然は人間を翻弄する人知を超えた猛威として描かれる。ここでの海は妖艶さからはほど遠く、“... colossal breakers were herding in, like moving leviathan-backs, twice the height of a man.” (162) というように怪物leviathanに例えられる。

この妖艶さから猛々しさへの変貌は、スペンサーの自然観の影響であろう。スペンサーは『社会学原理』の第8章 “Industrial Institutions” のIntroductory で「人類史において農業が発生したこと自体が驚きである」ほど、大自然の荒々しさは圧倒的であると以下のように述べている。

Indeed, it is surprising that agriculture ever arose at all: the reward was so uncertain and the labour required so great... While rude cultivation was limited to little scattered spots amid vast tracts covered with forest, wild Nature continually overwhelmed the husbandman's artificial Nature. (*The Principles of Sociology*, vol.2 328)

ここで “wild Nature” と対比して使われている “artificial Nature” という言葉は、おそらく「農耕地」を意味するのであろう。しかし更に考えを押し広げ、単に「森林に閉ざされた環境

で農地を開墾することが難しい」というだけの意味でなく、「人工的な自然」を圧倒する「荒々しい自然」と解釈すれば、ハーンが人間の造作物全般を凌駕する大自然の猛威をスペンサーから感じ取ったとも考えられる。

またスペンサーは『第一原理』の第一編「不可知界」の最終章でも、詩人の言葉を引用し、近代西欧文明も手が及ばない大自然の不可知性を表現している。

Nature is made better by no mean, But nature makes that mean: over that
art Which you say adds to nature, is an art That nature makes. (*First Principles* 104)

つまり、自然は人間がいかなる手段を講じても改良されるものではなく、自然が自ら手段を作っていく。ハーンの自然観に驚異の自然という不可知界の概念が持ち込まれたのにはスペンサーとの出会いがあったと考えることはできるだろう。

(2) 物質の不滅性、エネルギーの永続性

ハーンがスペンサーから影響を受けたのは、前述の不可知な自然観ばかりではない。もう一点、スペンサー思想の、物質は不灭でありエネルギーは永続するという考え方も、『チータ』に大きな影響を与えている。

『チータ』の読者は、実父ジュリアンが目の前の少女チータを実娘だと認知する寸前のところで死を迎える結末に、もどかしさを感じるであろう。離散していた親子が最後に互いを認知する大団円で、ましてやその直後に死が再び両者を分かちことになれば悲劇性も増す。大衆小説では、前半の数奇な運命と少女が元気に成長する過程は、そのようなラストシーンを効果的にするための伏線であることが多い。ところがこの作品の結末は、その定型から外れている。ジュリアンはヒントをつかみかけたところで意識朦朧となり、混乱とともに物語は幕を下ろす。出会った男性が実父であることに、チータも養父母も気付かない。このように、ハーンが従来の大衆小説の典型的な結末にない斬新な手法に挑み、敢えて読者にフラストレーションを与えてまで表現したかったものは、スペンサーが『第一原理』の中で述べる「物質の不滅性」(The Indestructibility of Matter, 143)、「エネルギーの永続性」(The Persistence of Force, 158)であろう。ハーンの哲学では、自然は人間の喜怒哀楽に無関心で、ただ淡々と人間の営みを内包しながらすすんでいく。チータは漁村の娘として元気に生きていき、場合によっては島の男性と結婚し子供も授かり、生涯を島で過ごすかも知れない。小説にそのような描写はなく読者が推測するのみだが、少なくとも将来を予感させる結末に閉塞感、絶望感は感じられない。しかしながら親子関係の確認、再会による医師の人生の達成感などの完結の図式は退けられる。

物語の中盤で、嵐の中奇跡的に一命をとりとめニューオーリンズの街へ戻ったジュリアンは、自分の墓碑の前に立ち、もはやこの社会に自分の居場所がないことを知る。彼は、“in the vast and complex Stream of Being he counts for less than a drop” (Chita 209) と感じ、世界の営みの中では個人の生死など些事だと悟る。この悟りは、ジュリアン自身の本当の死の場面でも繰り返されることになるが、これはまさしくスペンサー的と言えよう

『チータ』だけでなく、マルティニーク時代のエッセイ『仏領西インドの2年間』(*Two Years in the French West Indies*, 1890)にも、人間に無関心な自然のエネルギーを強調する特徴は見られる。第2部「マルティニーク小品集」(*Martinique Sketches*)の第12章「思惑は禁物」(*Pa Combiné, Chè!*)の第6節で、ハーンはマルティニークの自然について、““Of your willingness to obey her[Nature], she takes no cognizance; --she ignores human purposes, knows only molecules and their combinations.” (104) と語り、まだ自然を女性として捉えてはいるが自然は人間の営みには無関心であることを主張している。

『チータ』は悲劇的なストーリーにもかかわらず、読後感は暗いものではなく、主人公チータに将来はある。この物語には、大自然の前では個々の人間の死は悲劇とは限らないこと、人間の営みはまさしく永続するエネルギーのように続いていくことに対する、ハーンの達観が表れていると言えよう。確かにスペンサーの著書『第一原理』の第二部第6章「力の固在性」(*The Persistence of Force*)には、ハーンの見解に近い思想が書かれている。つまり、永続するエネルギーは人知を超えた絶対的な力“Absolute Force”であること、また不可知界“Unknowable”を扱う宗教と可知界“Knowable”を扱う科学は、絶対的な現実“Unconditioned Reality”において表裏一体であることが述べられている(163)。

実は『チータ』の登場人物にも、可知界と不可知界の表裏一体を象徴するような謎の人物ラルッセル(Laroussel)がいる。チータが奇跡的に助けられた10日後、白人の一行がフェリュエの家の前で少女チータと面会する場面で初めて彼は登場する。“Laroussel who had calmly taken a human life, a wicked human life, only the evening before” (199) のように、ある悪党の命を冷静に奪った人物として紹介されるラルッセルは、“he had never removed his black gaze from the child since the moment of her appearance.” (199) という風に、チータが姿を現した瞬間なぜか彼女を凝視する。この描写だけでは、何が彼の視線を捉えたのかは読者には分からない。英語、ドイツ語、イタリア語が通じなかった少女が、ラルッセルのクレオール語には反応し、コミュニケーションが成立する。ラルッセルは少女が「ズズンヌ」(Zouzoune)、「リリー」(Lili)と呼ばれていたこと、父が「ズリアン」(Zulien)で母が「デール」(Dèle)であることを聞き出す。彼は仲間の一行に、リリーはユウラリー(Eulalie)が縮まったものであること、「ズズンヌ」はクレオール語の愛称であること、おそらく富裕な家庭出身であることを説明する。更に「ズリアン」が「ジュリアン」(Julien)で「デール」は「アデール」(Adèle)だろうとまで通訳す

る。ラルッセルの心理描写がないため、読者は依然として不可知の状態に置かれているが、この時ラルッセルは、少女が自分の知り合いの夫婦の娘だと気づいていたはずである。

次にラルッセルが登場する場面がその状況証拠となる。嵐を生き延びてからニューオーリンズで医師として働いているジュリアンが、青年時代を回想する場面がある。サン・マルタンヴィル(St. Martinsville)での舞踏会で彼が恋に落ちた美しい女性は、明記されてはいないが後に妻となるアデルの可能性が高い。彼女を巡ってジュリアンは恋敵ラルッセルと決闘をする。僅か2分でジュリアンはラルッセルに敗れるが、なぜかラルッセルが身を引き、ジュリアンとアデルは結ばれたようである。その後二人の男は会うたびに挨拶を交わす間柄になる。時の流れが逆転しているが、この逸話とフェリユーの家でのチータとの会話の様子から、ラルッセルは初めてチータと面会した時にチータの両親に気づいたと考えざるを得ない。しかし、なぜかラルッセルは父娘の再会の手助けをしなかった。

更にその11年後、物語の結末で病床に臥すジュリアンは、成長したチータの看病を受けながら再びラルッセルのことを思い出す(250-51)。ジュリアンとラルッセルは南北戦争に従軍し、チャンスラーズヴィル(Chancellorsville)の戦場で共に戦った。露営でラルッセルはジュリアンに、ラスト島で嵐を生き延びたクレオール少女の話語るが、全貌を告げることなく戦死したらしい。病床のジュリアンは少女の話が気になるものの、目の前で看病してくれる若い娘チータと、奇跡的に助かったクレオール少女と、死んだ実娘ユーラリーとを結びつけることができない。ジュリアンは最後まで不可知界に置かれるが、読者はようやくこの辺りでハーンの手によって可知界へ導かれる。

『チータ』のプロットには偶然の連続が多すぎ、プロットが薄弱で小説として不完全だという批判もあるが(『仏領西インド・下』444)、ハーンは、読者に全てを明かさずに偶然の連続を語ることによって、不可知界の驚異を描きたかったと考えられる。なぜラルッセルは父娘再会の労をとらなかったのか、なぜチャンスラーズヴィルの夜営でラルッセルはジュリアンに「娘は生きている」と告げず婉曲的な言い方をしたのか、という謎に対してもハーンは明確な答えを記していない。恋敵の復讐心もしくは恋敵を助けた奇妙な友情は不問に付され、読者は不可知の世界に置かれたままである。人の行動の善悪判断を越えた不可知の世界をハーンは示したかったのかも知れない。

この考え方で『チータ』の独特の結末も説明できる。離散していた親子が互いを認知するのは可知界の結末であり、登場人物の誰もが真相に至らず結末を迎えるのは不可知界の結末である。可知界の住人は不可知界での出来事など知る由もなく、一方不可知界は可知界の基準に左右されることなく営まれていく。可知界での起承転結を物語ることによってカタルシスを与える大衆小説とは異質な手法で、個人の死は悲劇ではないこと、人間の営みは以前として淡々と続くことを表現しようとしている点は、スペンサーの不可知界の思想ともつながるハーン其自然観と言えよ

う。

3 『チータ』と文明

前章では、ハーンの描く自然が妖艶な女性的なものから不可知なものへの変容したこと、またエネルギーの永続性という思想が表れていることから、彼の自然観はスペンサーの影響を強く受け、『チータ』にもそれが直接的に表れていることを述べた。次に『チータ』に表れるハーンの文明観が、同様にスペンサーから社会的ダーウィニズムの影響を受けているかどうかを分析する。

(1) 個人を越えた視点

まず、『チータ』の物語の語り手の素性が、章を追うごとに揺らいでいく点に注目したい。

第1部「最後の島の伝説」(The Legend of L'Île Dernière)の1章から4章は完全に紀行文であるが、語り手は筆者ハーンであるのか、あるいは舟旅する人であるのか曖昧な状態である。それが5章から、水没した島イル・デルニエールの伝説を語り始める「わたし」に統一される。「わたし」は水先案内人とともに舟で旅する旅人らしい。しかし6章の島での宴、7章の嵐の後の死体が岸に漂着する様子、の段階では語り手ははっきりせず、全能の語り手が天から見下ろして描写しているようにも見受けられるが、やはり水先案内人が語る談話、あるいは「わたし」が水先案内人から聞いた伝説を書き取ったようにも思われる。第2部「海の力」(Out of the Sea's Strength)で、ビオスカ夫妻がチータを拾うところから、本格的な物語が始まり、小説らしい全能の語り手が登場する。ところが7章からジュリアン・ラブリエールが登場し、ジュリアンの視点が多用され始め、彼自身の回想、独白などが目立つようになる。第3部「高潮の影」では、成長していくチータの姿が描かれ、ビオスカ夫妻の視点を借り、時にはチータの視点を借りながらも全体的には全能の語り手が話をすすめる。

語り手をめまぐるしく変えることによって、一個人を越えた様々な視点の存在が描くのは、ハーンの意図した試みであろう。ハーンは、『チータ』を書き出す直前の1885年と実際に執筆を始めた1886年に、友人のクレイビール(H. E. Krehbiel)宛てに以下のような内容の書簡を送っている。

I have not yet abandoned the idea of evolutionary fiction, and find that my ethnographic and anthropologic reading has enabled me to find a totally new charm in character- analysis, and suggested artistic effects of a new and peculiar description. I dream of a novel, or a novelette, to be constructed upon totally novel principles; ... (*Life and Letters I* 347-48)

I am writing a novelette.... It will be all divided into microscopic chapters of a page or half a-page each. Every one of these is to be a little picture, with some novel features. Some touches of evolutionary philosophy.... there will be much more of suggestion than of real plot. (368)

『チータ』執筆前の抱負であろうと思われる書簡にある「民族学や人類学の書物から得た考え」というのは、おそらくスペンサー思想であり、「新しい人物分析、新しい特異な叙述の効果」は、語り手が次々と変わる効果のことを指しているのであろう。また執筆に入ってから書簡にある、①「筋書きよりも暗示が多く含まれたものに作る」とか、②「作品をそれぞれ半頁から一頁位の短い章に分け、各章が小説の特徴を持った小さな絵のようなものになるようにする」、③「“evolutionary philosophy” と関係させていく」といった記述には、全く新しい手法の作品を作ろうというハーンの意図が感じられる。

①の筋書きよりも暗示で物語が進められている点、各章が一片の絵のようである点は、まさしく『チータ』に当てはまる。物語の流れは時間軸を無視して進められ、登場人物の動きよりもハリケーンの猛威や熱帯の輝かしい自然の描写に頁が割かれている。一方②の半頁から一頁の“microscopic chapter”という章構成の特徴は、最も短い節でも2～3頁はある『チータ』にはあまり合致していないように思われる。当時の一頁の常識がどの程度であったかにもよるが、この特徴はむしろ『チータ』に続いてハーンが企画した中編小説“Lys”に表れている。西インド諸島から北米に移り住んだ女性が、物質文明によって活力を失い病に倒れる物語としてハーンは構想を練ったが、結局ハーパーズ (Harper's) 社によって出版を断られ、原稿の一部のみが『仏領西インドの2年間』の最後に挿入されることになった(船岡 68)。この作品は『チータ』以上に各章間のプロットのつながりが希薄で、それぞれが独立した生活の一断面を切り取った絵のようであり、大半の章が一頁程度にまとめられている。よって上記二つの引用で、ハーンは必ずしも『チータ』のみを指して語っているのではないかも知れない。しかし、ハーンが『チータ』や“Lys”で新しい形態の小説、それもスペンサー思想を意識した作品を考えていたことは確かである。

更に③の“evolutionary philosophy”という表現は、スペンサー主義に基づく進化論的思想を表すと考えられるが、『チータ』からは、西欧文明を世界の中心として捉え他地域の文化後進性を前提とした当時の進化論的思想とは、正反対の異文化への視点が感じられる。このことについて次に詳しく述べる。

(2) 異文化への視線

『チータ』には、様々な人種、言語が混在して登場し、どの文化にも優劣がつけられていない。

使われる言語を例にとっても、英語以外の様々な言語が、翻訳されずに原音のまま表記されている。例えば次の場面は、病床に伏したジュリアンと看病に訪れたチータが会話をする箇所である。簡略化するため、ダイアログのみを抜粋する。

“*M'sieu-le-Docteur, maman d'mande si vous n'avez besoin d'que'que chose? .*
... *Plait-il?*”

“Pardon me! --I did not hear you gave me such a start! Tell me, darling, your name; ... tell me who you are?” (*Dis-moi qui tu es, mignonne; --dis-moi ton nom.*)

“Chita Viosca. C'est a dire. Concha--Conchita.”

....

“Nothing I can bring you? Some fresh milk?”

“Nothing now, dear: if I need anything later, I will tell your mother when she comes.”

“Mamma does not understand French very well.”

“No importa, Conchita; --*le hablar en Espanol.*”

“*Bien, entonces! Adios, señor!*” (Chita 247-49)

会話は三種類の言語によって交互に織りなされ、特に英語で説明されることなく進められていく。英語圏の読者は完全には理解できないものの大きな流れはつかみ、そのマルチリンガルな世界観に浸ることができる。この箇所は、ハーンが様々な言語、文化の価値を認め、多様性を評価していることを示している。外国語を単なる意味不明の音として捉えると、このような発想は生まれてこないと思われる。

一方我々日本人のような英語圏以外の者が全て日本語に翻訳された物を読む場合、この特徴には気づかず通り過ぎてしまう。1999年の河出書房新社版（平川祐弘訳）では、英語以外の言語も全て一律に日本語に直され、その言葉が何語で発せられたかについての言及はない。この翻訳法は一定の速度で読み進めるには適しているが、多言語世界の魅力を伝えられない。

難波江仁美は、博士論文 “The Aesthetics of the Ghostly: Art and Life in the Work of Lafcadio Hearn” の中で、「ハーンは音への感受性が強く、外来語も自然の音の一部として捉え、作品中で表現した」（76－77）と主張している。つまり様々な外国語を敢えて翻訳せずに原音のまま表記し、文明の象徴である言語としてではなく、人知を超えた大自然の音の一部として扱っているという見方である。

この説は、「文明」から逸脱し「自然」へと向かうハーンの傾向を説明する点では説得力に富む。

しかし一方でハーンが少なくとも部分的には、外来語を単なる音ではなく、異文化の言語であると考えていたとも解釈できる。その例は、前に述べた若いチータと白人たちがコミュニケーションを試みる場面に表れている。英語、スペイン語、イタリア語など様々な言語が試されるが、チータは反応しない。結局はクレオール語で話しかけたラルッセルとのみコミュニケーションが成り立つ (Chita 200)。つまり、種々の言語を単なる自然の音ではなく、コミュニケーションする手段を確立した文明の象徴である言語として見ていると言える。これは『チータ』執筆当時のハーンが、「自然」から「文明」へ回帰する動きも見せ始めていたことを示している。

また物語中では、言語文化の多様性のみならずアジア太平洋文化の魅力についても触れられている。第一部冒頭のニューオーリンズ沿岸の島々の風土が描写される箇所、赤褐色の肌のマレー系の女性の美しさ “the beauty of ruddy bronze, --gracile as the palmettoes that sway above them” (147-48)、中国人の居留地の看板に描かれた表意文字 (漢字) の面白さ “a white sign-board painted with crimson ideographs the fantastic characters of the sign” (148) などの記述がある。カリブ海の多文化的な風土を描いたカリブ海文学については、1950年代に最初のブームがあり、その後1980年代以降再び注目されて、2001年のV.S. ナイポール (Vidiadhar Surajprasad Naipaul) のノーベル賞受賞につながった。こういった後世のカリブ文学では、土地の住民たちの心理、植民地社会の権力構造にまで踏み込んだ描写が特徴的である。一方ハーンの『チータ』では、目の前の多文化性を単なる一種の風景として捉えており、この点で限界が感じられるものの、1889年当時の作品としては彼の多文化的描写は斬新な視点だと言える。

更に『チータ』の中で黒いグアダルーペに関して、次のような一節がある。

.... and once she[Chita] shocked Carmen inexpressibly by stopping in the middle of her evening prayer, declaring that she wanted to say her prayers to a white Virgin; Carmen's Senora de Guadalupe was only a negra! and she[Carmen] explained to her --I know not how --something very wonderful about the little figurine, something that made Chita's eyes big with awe. Thereafter she always regarded the Virgin of Wax as an object mysterious and holy. (217-18)

嵐の襲来以前、フランス系上流階級のチータの生家では、おそらく真白なマリア像が拝まれていたと思われる。一時は「こんな negra ではなく、白いマリア像に祈りたい」と口走りカルメンを困らせたチータも、養母の説明を聞いて畏敬の念に打たれ、蠟でできた黒いマリア像を聖なる神秘のものとみなすようになる。ハーンは、ここでカルメンが具体的に何を語ったのかを明らか

にせず、ただ彼女が黒いマリア像に関する何か素晴らしい話を語り、チータが感化されたという事実のみを記している。しかし、ここでカルメンが語ったものは、おそらくメキシコのグアダルーペの聖母伝説であろう。ハーンは西欧文化圏外の聖母伝説について知っており、敢えて白人少女が黒い聖母像を受け入れるこのエピソードを挿んだのではなかろうか。

太田雄三、大塚英志らは、ハーンがスペンサーから人種主義の影響を受けていると主張している。太田はその著作『ラフカディオ・ハーン——虚像と実像』の中で、「ハーンが常に人種の異質性を前提として日本を欧米に紹介してきた」(12-14)ことを述べている。また大塚は著作『「捨て子」たちの民俗学——小泉八雲と柳田國男』の中で、「ハーンは遺伝に文化事象を還元し説明しようとしている点で、人種主義的であったと言わざるを得ない」(87-88)と述べている。ハーンの来日後の著作の中にその傾向がない訳ではない。また『仏領西インドの2年間』での混血の人々の説明には、現代の基準からすると明らかに人種差別的な描写が存在する³⁾。しかし少なくとも『チータ』に関しては、前述のようにハーンの人種や異文化についての旺盛な好奇心が表れている。ハーンは当時より、異文化にはそれぞれの価値があり優劣がつけられないことに、ある程度気づいており、人種や言語の問題に関して、当時の社会規範であったスペンサー主義よりもはるかに自由な、時代を先取りした感覚を持っていたのである。

おわりに

ハーンは『チータ』執筆の過程で、自然と文明の対立に折り合いをつける糸口を見つける。それは、猛々しい大自然の中で、文明の力で子供を庇護する養母との出会いである。文明が強制する社会的秩序に辟易していた時期のハーンにとって、最初マルティニークの自然は文明秩序も転覆させる妖艶な魅惑(enchantress)に感じられた。しかし実際に自然に囲まれ生活し『チータ』を書き上げるにつれ、自然は必ずしも桃源郷ではなく、まさに実母のように生産力と破壊力を兼ね備えた恐ろしい力を持っていることに気づく。ハーンにとって自然は、妖艶な魅惑から不可知(unknowable)なものに変わっていった。不可知的自然は人知を越えた世界という意味で文明の狭い価値観からの解放ではある。しかし一方不可知の自然の驚異に対抗できる文明の庇護をハーンは模索した。その答えが養母であり、可知的(knowable)な文明の働きをする養母のテーマは、彼の次作品『ユーマ』にも受け継がれる。

ハーンの自然観と文明観を総括すると、実母は自然を象徴し、養母は自然と折り合う文明を象徴していると言える。彼にとって、自然から極度に乖離した文明である大都市は決して魅力的なものではなく、あくまで自然と調和した文明が理想の世界である。来日後も彼は都市圏ではなく島根県松江に定住しており、自然と調和した人々の営みを求めた。自然観に関しては19世紀末のファムファタル的な妖艶な自然観から、スペンサー的な不可知の自然観を形成するようになる。

またスペンサーの自然観に関連して、可知界の知らぬところで不可知界のエネルギーは永続していくという、来日後に発展させる輪廻思想の原型を形作る。一方スペンサーの文明序列化に対し、ハーンは常に異文化への暖かい視線を持っていた。

ハーンのこの自然観の変化と養母の発見は、ほぼ同時期に起こっており、『チータ』はハーンが文明から自然への逃走に区切りをつけ、文明への回帰に向かう契機となった作品である。以後のハーンの流れを決定付けた作品ともいえよう。

注

- (1) 平川祐弘は論文“Hearn and the Sea”の中で、洋の東西を問わず海を母性と結びつける思想が普遍的に存在することを述べている。その根拠として、表意文字である漢字の「海」と「母」の類似性、音声面で、フランス語のmer（海）とmère（母）の発音が同じであること、日本語の「海」（うみ）と「産む」（うむ）が似ていることなどを指摘している(48)。ハーンを母性と結びつける考え方は、彼のの実験に裏打ちされたものであると同時に、万人にも理解できる普遍的思想であるとも言える。
- (2) 西成彦は論文「ラフカディオ・ハーンの放浪と遍歴」の中で「ハーンは合衆国の他のどこにも見出すことのできないこの町[ニューオーリンズ]の魅力を、失われゆくものの魅力として描いている。それは哀悼と喪の感情とともに描かれた文章の数々である」(57)と述べ、その例として英語新聞『アイテム』(Item)の1879年3月9日号に載った記事「夢の都」(The City of Dreams)を挙げている。その記事には「伝染病の流行がニューオーリンズの町の風俗に変化を強いる以前、人々の妄想を支配していたのは金であり、(中略)人々の心を蝕む夢と悩みの種であった」(58)ことが記されている。また以下の引用はNew Orleans of Lafcadio Hearnからのハーンのコラム記事の抜粋である。

City Item, August 24, 1880.

The papers are still obliged to record daily a variety of bloody crimes and casualties. ...

It is the result of steadily increasing demoralization of the police force and an increased difficulty in securing a proper administration of justice. (67)

- (3) Two Years in the French West Indies, vol.3 21-22, vol. 4 10-13などが例として挙げられる。

引用文献

- 太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像』岩波書店、1994年
 大塚英志『「捨て子」たちの民俗学—小泉八雲と柳田國男』角川選書、2006年
 小泉八雲『仏領西インドの2年間 上・下』平井呈一訳、恒文社、1976年
 大東俊一『ラフカディオ・ハーン—思想と文学』彩流社、2004年
 西成彦『ラフカディオ・ハーン—放浪と遍歴—ルイジアナがその人生の半ばで負った意味』『アメリカ文学とニューオーリンズ』風呂本惇子編著、鷹書房弓プレス、2001年
 ヒューズ、ジョージ『ハーン—の轍の中で』平石貴樹、玉井アキラ訳、研究社、2002年
 船岡末利『ラフカディオ・ハーン—のニューオーリンズ時代』『東海大学紀要—外国語教育センター第12輯』東海大学外国語教育センター、1991年、57-68
 Bronner, Simon J. ed. *Lafcadio Hearn's America*. Lexington: UP of Kentucky, 2002.
 Hearn, Lafcadio. *Chita. The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes*. Vol. 4. Kyoto: Rinsen Book, 1973.
 ——. *Life and Letters I. The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes*. Vol. 13. Kyoto: Rinsen Book, 1973.
 ——. *Life and Letters II. The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes*. Vol. 14. Kyoto:

- Rinsen Book, 1973.
- . *Two Years in the French West Indies. The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes.* Vol. 3-4. Kyoto: Rinsen Book, 1973.
- . *Youma. The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes.* Vol. 4. Kyoto: Rinsen Book, 1973.
- Hirakawa, Sukehiro. "Hearn and the Sea." *Lafcadio Hearn in International Perspectives.* Ed. Sukehiro Hirakawa. Kent: Global Oriented, 2007. 41-54.
- LaBarre, Delia. *New Orleans of Lafcadio Hearn.* Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007.
- Makino, Yoko. "Hearn's 'Yuki-Onna' and Baudelaire's 'Les Bienfaits de la Lune.'" In *Rediscovering Lafcadio Hearn: Japanese Legends, Life & Culture.* Ed. Sukehiro Hirakawa. Kent: Global Oriented, 2004. 199-209.
- Nabae, Hitomi. "The Aesthetics of the Ghostly: Art and Life in the Work of Lafcadio Hearn." Diss. Stanford U, 2000.
- Spencer, Herbert. *First Principles.* New York: P. F. Collier & Son, 1901.
- . *The Principles of Sociology.* Vol. 1-3. London: Williams & Norgate, 1906.
- Twain, Mark. "Life on the Mississippi." *Mark Twain: Mississippi Writings.* New York: Library of America, 1980. 227-616.